※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

巻頭言

当社技術開発の原動力

山　口　英　和*

1．はじめに

朝夕の通勤電車内の景色もずいぶん変わってきたなと思う今日この頃である。昔は新聞・雑誌を読むのが電車内の普通の景色であったろうか。今は携帯電話・スマートフォン・タブレット・パソコンを操作している姿が普通になってきた。この変化は「時代」と言えば，それで終わりであるが，この「時代」をつくったのは何かを考えることも興味深いことである。

二十世紀後半からこの二十一世紀にかけての技術の進歩は目を見張るものがあり，とくにIT技術の進化は，社会・産業分野はもちろんのこと，一般の家庭生活までも変えてきた。どこまで進化すれば良いのか，どこまで進化するのか，凡人である私には予測もつかない。とは言うものの技術の進歩に貢献しているのは私達人間であり，技術の進歩の恩恵を一番受けているのも私達人間であろう。余談であるが，人間の近くに生きる動物たち（一般的にはペットと呼ばれているかも知れないが）も恩恵を受けているであろう。

さて，脱線しないうちに本題に入って行きたい。技術は企業の中ではどのように進歩していくのかという大それた内容を論じるつもりではないが，当社の中で技術進歩を促せてきた活動の一つについてご紹介し，皆様のご参考に供すればと願うものである。

2．機械遺産に登録された「多機能式自動券売機」の誕生

当社は，自動券売機類を代表とする交通事業者様向けの駅務関連装置，それら駅務関連装置や金融・流通分野の装置に組み込まれる硬貨・紙幣・カード・印刷関連ユニット，更にはセキュリティゲート，地震計測装置，駐輪場管理システムなど幅広い製品を供給しているメーカーである。

1969年の当社創立時に製造し，1970年に大阪で開催された万国博覧会の万国博中央駅に設置された「多能式自動券売機」は，2011年日本機械学会機械遺産第50号に登録された。当時としてはボタン一つで多種の印刷された切符を発行する機械として脚光を浴び，当社歴史のスタートを華々しく飾る製品であった。たくさんのリレーを使用し，切符のロール紙に行き先・料金などを印刷して，カットして発行する制御技術，さらに擬似硬貨検出機能など画期的なものであったと思う。当時，開発に関わった諸先輩の苦労談は，何度聴いても私達の新製品開発へのチャレンジ精神に希望と勇気を与えてくれるものである。

* 株式会社高見沢サイバネティックス　常務取締役　経営管理本部長　Hidekazu YAMAGUCHI

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

3.「新製品開発提案」制度の継続

当社には，新製品開発に関して，創業以来脈々と引き継がれている言葉がある。「開発か，それとも死か」という言葉である。当社は「世の中に我々の技術を使っていただくことで，社会に貢献すること」をモットーとして創業し，事業を継続している。即ち，次々に新しい製品を世の中に送り出していくことこそ，私達の使命であり，当社が事業を継続していける糧ということである。

こういった風土の中で，当社の中には全社員による「新製品開発提案」の制度があり，現在も脈々と続いている。この「新製品開発提案」の制度は，1990年に規程を定めて，正式に制度化されたものであり，現在まで累計で一万件を遥かに超える提案が出されてきた。

通常は，毎月，特にテーマを決めずに広く全社員からの提案を受け，各部門長が部門代表を選出して，「新製品開発提案検討委員会」において審査し，数件を経営幹部による「開発会議」に上申するといった流れである。「開発会議」においては，関連の事業部門が中心になり，技術の新規性・実施可能性，製品化の可能性，新規事業への展開など，多面的な審議を行い評価している。また，年度の中では，テーマをあらかじめ定めた「新製品開発特別提案」の月間を設定し，全社員でアイデアを出すといったことも行っている。もちろん，提案に対しては創立記念日に表彰することで提案者への褒賞も行っている。

提案の中には「こんなこと，技術的にできるのだろうか」「これをやることは夢だよね」といったものも多くあり，「よし，基礎研究からやってみよう」「世の中が求めているのであれば製品化しよう」と技術的なチャレンジ精神に火をつけてくれる。技術開発を重点戦略とする当社の貴重な原動力となっている。もちろん，これらの提案の中には新製品として世の中に送り出し，現在の製品群の根幹をなしているものもある。更には特許・実用新案・意匠として登録したものもあり，当社の知的財産権の蓄積にも大きく貢献していると自負している。

4．おわりに

ここにご紹介した内容は，当社だけではなく多くの企業で行われていると思う。大げさなタイトルをつけ，一笑にふされることを覚悟であったが，ご参考に供すればということで筆をとったものであり，ご容赦いただきたい。